
ぼくときみのバスケット同好会

櫻井 理子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくときみのバスケット同好会

【Nコード】

N7639S

【作者名】

櫻井 理子

【あらすじ】

バスケットをすることから離れてしまった主人公、篠崎 翔太。

ある日、少女に魅せられる小さな翼の羽ばたき…

それから主人公は揺らいでいく…

青春 いま を翔ける少年たちの切なくて甘酸っぱい恋愛、そして
少しおバカでなんだか感動的な学園スポーツコメディ！

序章 第一話 羽ばたけない…

『人は飛べると思うか？』

僕はいつかに言われたその言葉を思い出す。

『翼のない僕らは飛べるわけないだろ…』

なにも好きになれなくて、心を閉ざしていたあの頃。

『そうだな、飛べないかもな…。だけど、無理だと思ってたらいつまでたっても飛びたてないさ』

僕は思った…

『君は知らないだけだ。空の飛び方を…』

翼はない。だけど…

『なら、教えてくれ。空の飛び方ってやつを』

見上げてるだけなのはもう嫌だ、と。

日の眩しい光に顔をしかめながら屋上へと出た。

そこは茜に染まり別世界のようにも感じてしまう。

誰もいないことを確認して僕はそのままフェンス越しに行きひとり茜に染まる街を見下ろす。

どうしてこんなとこに来たのかというと、気持ちを落ち着けたかったからだ。いつも嫌なことがあるとここへきては屋上からこの景色を見下ろして気を紛らわしているのだ。

ふと空を見上げるとそこには何匹かの鳥が羽ばたいていた。

「僕も…羽ばたきたいな…」

気を紛らわすどころかなんだかもっと深く考えるようになってしまっていた。

はあ。と深くため息をつき茜の街を眺める。

「そんな深くいため息をついちゃうと幸せ逃げちゃうぞ?」

「えっ?」

「こんにちは」

いつの間にか僕の隣りに女の子がひとり、僕と同じように街を見下ろしていた。

にこりと可愛い笑顔を僕に向けてくる。

というか、可愛いなあ…

髪はセミロングでサイドポニーにっていて身長は僕が大きいのか彼女が小さいのかそれともその両方なのか、分からないがかなりちっこい。100人アンケートをとっても間違いなく9割以上が小学生と答えるだろう。いきなり話しかけてくるあたり見た目と同様、とっつきやすい性格なのだと感じさせた、

あまり人とコミュニケーションをとらない僕としたら女の子と二人というシチュエーションはなんとも辛いな…

「なんかね、ここの景色わたし好きなんだあ。なんかね、空を見上げるのって気持ちいいよね?」

女の子は茜の街から僕へ顔を向けて話しかけてくる。なんだ…返答待ち、なのか?

「そうか、俺は見上げてるだけなんて嫌だ…」

言っている意味が分からない、といった感じに彼女は首をかしげる。

「まあ気にしないでくれ。ただの戯れ言だからさ」

「あなたは、飛びたいの？」

「いや、もう僕は地に堕ちた。いまさら羽ばたけないよ」

「……………」

「きみ、名前は？」

「漣だよ。笹川 漣 ささがわ みお !今は小学6年生で特技はバスケだよ」

どうして小学生が僕が通う高校にいるのかというと、ここ澄川学園は小学校から大学までエスカレーター式の学校でそれなりの進学校だからだ。

そうか、小学生か…

僕は唇を軽く噛みバスケという言葉聞き入れる。

「そうか…。頑張れよ」

「篠崎先輩もバスケ、やりましょうよっ」

無邪気でそれでいてしっかりとした目で僕を見つめてくる。

この子、僕のことを知っているのか？

「わたし、先輩のこと知ってます。だけど、このままでいいいで…」

「僕はもうバスケはやめたんだ。僕を知っているならわかるはずだろ？ もう羽ばたけない…」

「……………っ。明日も、ここで待ってます。先輩、必ず来てください」

僕はその言葉には応えずそのまま屋上から出て行った。
だけど、もう無理なんだよ…。

僕はもう羽ばたけない…

序章 第一話 羽ばたけない…

(後書き)

コメントください！

読んでいただけたら恐縮です

序章 第二話 羽ばたく翼…

わたしがまだ4年生のころ。

お兄ちゃんのバスケットチームの試合の応援へ行った。

相手のチームはかなり強くお兄ちゃんたちは苦戦をしいられていた。もう簡単に巻き返すのは難しいくらい。点差が開いていてお兄ちゃんたちのチームも半分諦めムードが流れていた。

「諦めてんじゃねーよツツ！！」

と、相手チームのタイムアウトに入るとひとつの怒声が木霊した。

その声はわたしのところにまで響いてくる。

その怒声を発した人は見覚えがあった。たしか、お兄ちゃんの親友でチームのエースでもある篠崎涼介先輩。

「まだ試合は終わってねえんだよツツ！！ 諦めてんじゃねーよツツ！！」

その怒声はなんだか見ているわたしも熱くしてくれるような気がした。

篠崎先輩の声に目が覚めたのかな？ さっきまでのムードが嘘のように会場中に応援の声が飛び交う。

「かつこいいなあ…」

気がついたらわたしは篠崎先輩のことを目で追っていたのに気付いた。

きつとこの頃からわたしの初恋は始まっていたんだ。

そして篠崎先輩率いるチームは逆転勝利をおさめた。

試合の後、わたしはお兄ちゃんへ会いにいくという口実で篠崎先輩に会いに行った。ごめんねお兄ちゃん…。

「あれ、澪じゃん？ どうしたんだ？」

「えっ？ この可愛い女の子が妹の澪ちゃんなのかつ？」

可愛い…可愛い…可愛い……

篠崎先輩にそう言われるとなんだかドキドキしてしまう。小学生ながらにすこしだけ嬉しくなってしまう。

「えと…はじめましてっ。さきほどの試合見せていただきました！とてもかつこよかったですっ」

「あはは、ありがとな」

「家ではこんな妹なんか見たこと…ヘブシッ……」

「なんか隆が腹押さえて悶えてるんだが…」

「気にしないでください 最近お兄ちゃん便秘なんですよっ。ねー？ お・に・い・ちゃんっ？」

わたしのお兄ちゃん、笹川隆 ささがわ たかし はいいわゆるおバカさんです。しょうじき篠崎先輩がお兄ちゃんだったらどれだけよ

かったか…。

「それはそうと澪ちゃんもバスケやってるだつてね？」

篠崎先輩がわたしに話しかけてくれたよっ！ はう……。

「は、はいっ。まだまだヘタクソですけど…」

「そうなんだ？　じゃあ今度バスケ一緒に練習しようよ？」

「えっ？」

なにになになに…？　もしかしてバスケデートッ？
まさかいきなり誘われるなんて…

頭の中が真っ白になってなんて返事すれば…？

「隆とか僕の妹もくるからさ」

「ぜひとも行かせてくださいっ……あれ？」

なんだ…ふたりきりじゃなかあ
ちよっぴり残念、ちよっぴりホッとした。

「じゃ、今度の日曜日にでも」

「は、はい！　ありがとうございますっ」

ははは…。と笑いながら篠崎先輩は他の友達のところへむかって行
ってしまった。

はう…　かっこいいよお。

「次の日曜日、かあ」

「俺の予定は無視なんだな…」

「楽しみだなあ」

「無視かよっ？」

わたしは知らなかった…。

この約束が彼の翼を折ってしまうといふことに…

序章 第二話 羽ばたく翼…（後書き）

読んでください！

コメントください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7639s/>

ばくときみのバスケット同好会

2011年10月9日01時02分発行